

# 人間らしい仕事

## ～協同の働き方とディーセントワーク

堀内光子(ILO駐日代表・ジェンダー特別アドバイザー)

資本主義社会での仕事というのは、働く人たちが自分の意思や生きがいではなく、むしろ受身になってしまっている。先ほど大内先生もそういったお話をされましたが、ILO（国際労働機関）は、人々にとって生きるために不可欠な「仕事」に取り組み、世界中で活動している国連の専門機関です。

「仕事」についていくつか申し上げたいと思います。農業社会では、仕事も、家庭も、地域も同じ場所でした。それが工業化社会になり、工場やオフィスができたときに仕事と家庭と地域の分離が起こります。これが男性と女性の格差、分離をはぐくんできたと思います。工業社会の中で男性は一家の稼ぎ手、女性は育児や家事をするアンペイド（報酬を生まない）労働を担うという明確な違いが生まれてきました。「女性は家庭、男性は仕事」という分離、「夫と妻が月と地球に住んでいる」ような非常に距離が遠い、お互いが何をやっているかわからないような実態がありました。特に日本の場合、農業社会から工業社会へ急速に動いたため、この乖離が短期間に非常にきつくなった社会ではないかと思います。1960年代に

は集団就職で農村の人たちが都市に出てきた時代がありまして、人口が都市に集中し、いろいろな弊害も生まれました。

### グローバル化の弊害

そういう時代を過ぎて、いまは脱工業化社会といわれていますが、実は脱工業化社会はグローバル化が世界を覆っています。グローバル化は必ずしもマイナスだけという評価はできないと思っております。グローバル化でビジネス機会が増えたり、貧困が劇的に減ったことも確かです。

しかし同時に、格差が非常に拡大しているという問題がございます。世界人口の2割を占める高所得諸国の人々が、世界のGDPの約9割を占め、最下層の2割の人々は、世界のGDPの1%を占めるにすぎない状況です。

また企業の生産様式も、低価格競争で価格の低いところで生産が行われるという風に変ってきております。スイスのある有名な大企業の社長は、グローバル化の定義について「いつでもどこでも、生産できて売れる、そして労働保護はあまり考えないで



#### ■堀内光子（ほりうち みつこ）氏プロフィール

神奈川県生まれ。東京教育大学卒業。1966年、労働省に入る。84年から88年まで国連職員。93年から96年まで日本政府国連代表部公使。96年から2000年までILO事務局長補（アジア太平洋担当）。その後、駐日代表に就任。

いい。」とはっきりおっしゃっていて、たいへん驚きました。

そういう意味で、グローバル化時代というのは、まさに“大競争時代”と実感しています。ILOとしては、人々の人的資源を高めて、生産性を高める競争をすべきである、と言っているのですが、現実には低価格競争になっているわけです。しかし、こうした時代だからこそ、人間らしい生活、何のために仕事をしているのか、生活をしているのか、逆に問われるのではないかと思います。

### 市民社会組織の台頭

一方で最近の世界的な流れで、グローバル化は意外にも地域化も押し進めています。大競争が行われると同時に、どこでも生産物を運べる、生産拠点もつくれる。また情報科学技術の発達もあり、都会にいたなくても仕事ができる。人々の距離を縮めることが可能になっています。

それから、脱工業化時代では、サービス産業が発達してくる。やはりサービスは自分の住んでいる地域で行われるというのが大

きな要素となり、それが地域の活動を促進しているといえると思います。

何よりもすごいのは、人々が自分の生き方や生活、生きがい、人間らしさを考えるようになり、それと呼応して市民社会組織の力が非常に強くなっていることです。

1990年代、国連が人間開発を目標に掲げました。それと同時に90年代を通じて社会問題に関する国連の様々な世界会議が行われてきました。その皮切りが90年の「こどもサミット」です。それから92年の環境サミット（リオデジャネイロ）、93年の人権会議（ウィーン）、94年の人口会議（カイロ）、95年の社会開発サミット（コペンハーゲン）、女性会議（中国）、そして96年がハビタットⅡ（イスタンブール）という都市と住居の問題、ということで一連の社会会議が国連を舞台に開催されました。そこで大きな力を持ったのが、市民組織でございます。92年の環境サミットがひとつのターニングポイントだったのではないかと思います。

それ以来NGOが政府代表団のなかに入ったり、決定事項へのロビー活動も政策提言能力の充実と相まって強化されています。

また90年代は市民社会組織がさまざまな活動とあわせて、自己責任、自立といった側面も強くなってきていると感じております。

さらに言いますと、ついこのあいだ行われましたヨハネスブルクの持続可能な開発サミット(2002)は、92年のリオの環境サミットの10年後という位置づけだったのですが、大きく違っていたのは、環境だけを対象にしていたわけではない、というところですね。ヨハネスブルクでは持続可能な開発に向けた環境、開発、貧困、社会問題というこれまで個別に取り組んできた社会問題をひとつの輪としてきちんと入れていくことを理解された会議でした。しかし、社会問題を国連の中で大きな課題とするためにはまだまだ力が必要であることには変わりありません。ですから、市民社会組織の一員として、協同組合にも大変期待を寄せているところでございます。

## 協同組合との出会い

私が一番最初に協同組合に出会ったのは、パレスチナの難民キャンプの場で、15年ほど前になりますが、とても強烈な印象を受けたのを覚えております。



けたのを覚えております。

難民というと、非常に弱い立場で、福祉や人道支援ということでしか対応できないのではないかと考えていたのですが、すばらしい女性が

協同組合をつくって難民の女性たちの自立を支援していました。しかもみなさんが、協同で平等の立場で民主的な運営で仕事をするというものでありまして、そういうやり方で女性たちが大きな成功をおさめておりました。

縫製業が中心でしたが、そのための職業訓練や、保育園、子どもたちに給食するためのパンを焼く工場があったりと、非常に立派で、協同組合のもつ活力を強く感じました。

2つ目は、中国の例で、ILOのひとつの村のプロジェクトを訪問したのですが、そのプロジェクトでは麻袋のようなものを共同でつくっていました。共同することにより仲介人に買い叩かれず、自分たちの権利を守り生活を向上させることができる、ということを感じました。

3つ目は、今年が国連山岳年ですが、ミャンマー、タイ、ラオスの山岳民族の自立のために、協同組合は大変重要な役割を果たしているんです。村の中で仕事をして、収入を得ることなのですが、ラオスで会議に出てまいりました。山岳民族は隔離されたコミュニティに暮らしていることもあり、その活性化にも役立っているということでした。

また4点目は、つい最近、今年の9月にフィンランドを訪れた際、労働者協同組合を訪問させていただきました。こういうご時世ですから、私が訪れたところも失業対策に寄与する協同組合であるという思い込みがあったのですが、そうではありませんで、その協同組合は新しい医療を模索しているお医者さんたちがつくった協同組合のグループでした。その方たちは医療というのは単に悪いところをみつけてそこを取るという



欲で行うものであるのですが、ILOの1966年の勧告（127号勧告）もそうなのですが、国の力を過大に評価していたというところがありまして、それがひとつのネックになっていたということができると思います。

### 雇用の確保が重要

今年、協同組合の促進に

関する新しい勧告ができたわけですが、これはディーセントワーク＝人間らしい仕事をつくるための、たいへん強力な方策だと思います。

なぜこの時期に協同組合の勧告を見直したかということ、経済社会、政治的变化がこの背景にあるわけですが、政治的变化では冷戦構造の崩壊が大きいと思います。先ほど申し上げたアジアで協同組合がなかなか進まなかったひとつの原因が社会主義体制の遺産というのは、私の誇張した表現かもしれませんが、いずれにしても公的部門の規制が非常に大きかったことが、影響していたと思います。

社会経済変化のなかで大きいのはグローバル化という経済変化があります。現在、世界で52億人の人口のうち30億人が労働力と数えられますが、うち25～30%が失業者と考えられています。完全失業者でも1億4千万人、今後10年間で世界で5億人の仕事を提供しないと、これから労働市場にはいつてくる若い人の仕事が確保できない状況です。貧困をなくすためにも仕事をつくるのが基本的に重要だと認識しています。

しかし仕事をつくるというと、経済成長

のではなく、人間が生きる力、生きようとする意欲を生かしながらやるのが本当の医療だと。こういうのは絶対に今の病院ではできない、だから自分たちが協力してやらなければいけないと、非常に熱心に語っていたのが印象的でした。

協同組合は、単に失業対策や仕事の創出だけではなく、仕事の新しい価値を創造できる、そういう役割を担える存在であるという、新しい発見をしたところであります。

それから協同組合のなかで印象に残るのは、やはり女性たちの活動です。ILOでもアジアの女性に向けて貧困対策、所得創出の活動をやっておりますが、今は小規模資金供与や起業家を育成するという手法です。しかし一人でやるというのはリスクを負わなければいけないので限界がある。やはりグループをつくって、仕事をするということが大変重要なのではないかと考えております。

ただ、アジアではどうしても協同組合が社会主義体制の遺産、要するに公的部門の規制が強すぎるというイメージが強すぎて、なかなか理解が進まないという現状があります。協同組合は基本的に人々の規律や意

すれば自然にビジネス機会も増え、雇用機会も増えるという結論にほとんどがなりがちですが、実は経済成長しても「雇用なき成長」といわれていまして、リストラや労働者を減らして成長するということもみられます。やはり雇用を増やすという形での経済成長が必要だと思えます。

もちろん、増えればどんな仕事でもいいというわけではなく、ディーセントワーク＝人間らしい仕事をつくるのが非常に重要であります。

## 重要な経済のひとつ

また先進国では人口の変化で、高齢化が深刻な問題になっていますが、70年、80年代のヨーロッパでは労働者協同組合の再生がはかられ、コミュニティでのサービスを提供するという意味で、大きな変化がおきています。また、家族の変化、女性の労働市場への進出という変化も背景として、新たな介護やサービスのニーズが生まれてきています。

こうした点からも、経営者も働く人も同人格であり、民主的な運営がなされる労働者協同組合は、たいへん重要な役割を果たす存在であると考えています。

また、協同組合はグラスルーツ（草の根）の民主化を促進する役割を果たすものと考えています。

いま仕事というのは、大企業で増えるという状況ではなく、法律の保護が及ばない、非典型やインフォーマル経済というところで増えています。協同組合は私たちが抱えている、インフォーマル経済のなかで働く人たちがきちんとした権利をもち、保護を受けることができる重要な役割を担うもの

と考えております。

ILOは1920年に協同組合部を設置しております。実はILOの初代事務局長のアルベルト・トーマは、ICA（国際協同組合同盟）の執行委員でございました。そういう意味で、ILOは設立当初から協同組合に大変重要な位置づけをしておりまして、国連機関の中で最も早く協同組合を取り上げて推進している機関であります。現在でも各地で協同組合の促進のお手伝いをさせていただいておりますので、これからもみなさま方がコミュニティレベルで力を発揮し伸びていくことのできる社会づくりにご協力ができれば大変嬉しいと思えます。

ノーベル経済学賞受賞者アマルティア・センさんはILOにご協力をいただいていた先生で、ILO総会で基調演説をしていただいた時に、「貧困とは能力の浪費であって、人間の能力の開発が貧困対策の基本だ」とおっしゃっておられます。みなさまと一緒に日本でも協同組合の推進に向けて働いていきたいと思えます。



## (参加者の感想)

- 特に堀内さんの世界の協同組合の活動の多様性と可能性に感動しました。(66歳男性：千葉高齢者協同組合)
- 堀内さんのさまざまな海外経験や、歴史、これからの課題を聞くことができ良かった。専門用語が多く、難しく、勉強不足を感じた。(20歳女性：千葉大学学生)
- 「協同」の意味を全く知らずに参加したが、世界的な動きとして今問われていることがわかった。(37歳女性：グループホーム職員)
- 堀内さんの国際的視点での協同の意義の話から、女性や高齢者にとって協同組合は大切だということを実感しました。日本中が失業であふれる前に、私たちの考え方が多くの国民の目に触れ、考えられるような運動が、いっそう望まれると思います。と同時に労協法が一日も早く制度化されることが、私たちの活動の大きな力と自身になります。(48歳女性：労働者協同組合)
- 大変分かりやすく、歯切れの良い口調で協同組合での協同労働が人間らしいディーセントワークについて学ばせてもらった。若い人にも、明るい未来の展望が持てるような21Cの社会をつくっていくのにほんの少しでも貢献出来ればと思った。(女性：地域福祉事業所)
- 「ディーセント・ワーク」の言葉をはじめて知りました。人間らしい働き方だそうですが、今後そのようになることを願っています。(女性：地域福祉事業所)
- 障害のある方にもとても大切な内容でした。もっと多くの所でディーセントワークの話がお聞きできたらと思います。是非、行政の方にも聞いていただきたいお話です。(女性：障害者自立生活支援センター)
- 働く人の本質的な労働の価値についての解説とこれからの市民参加型社会に於ける労働のあり方について講演され、改めて日本の今後の市民のあり方を考えさせられた。(63歳男性：NPO)
- グローバル化の影で、人間らしさ、生き方を考えて働くことが逆に重要になっていることがよく理解できた。フォーマル、インフォーマル労働というくり方は、時としてフォーマルがベストと考えられてしまいがちだが、インフォーマルだからできること、最初はどうしてもインフォーマル労働で出発しなければできていけないこともあり、私たちの実践もそうであると思う。ディーセント・ワークを前面に出していくことで、協同労働がさらに引き立っていく。(36歳男性：労働者協同組合)

